

主が友と呼んでくださる特別の恵み

ヨハネ福音書15:12-17

【新改訳 2017】

15:12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

15:13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

15:14 わたしが命じることを行なうなら、あなたがたはわたしの友です。

15:15 わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。

15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。

15:17 あなたがたが互いに愛し合うこと、わたしはこれを、あなたがたに命じます。

【祈りながら考えよう】

- (1) 「友」と「しもべ（奴隷）」の違いは何ですか。主が弟子たちを友と呼んだのはなぜですか。
- (2) 主イエスに「友」と呼ばれる条件は何ですか。
- (3) 弟子たちが主を選んだのではなく、主が選び、任命したと語られたのはなぜですか。

【解 説】

（1）私たちが「友」と呼んでくださる

主イエス・キリストは、私たちキリスト者を「友」と呼んで下さると言われた。

「わたしが命じることを行なうなら、あなたがたはわたしの友です。わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。」(14-15節)

私たちは、キリストを主と信じ、キリストの尊い血によってキリストのものとして買い取られた者たちである。言葉を換えれば、「キリストのしもべ（奴隷）」である。

どんな人でも、悪魔の奴隷か、さもなければキリストの奴隷かであって、このどちらでもない人はいない。さらに、キリスト者は、悪魔の奴隷であったところから、キリストの血によって買い取っていただき、キリストの奴隷となった者たちである。しかし、主はこう言われました。

「わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。」(15節a)

何という特権でしょうか。このような特権は、この世のどんなものとも比較することができない。キリストが「わたしの友」と呼んでくださる間柄に、私たちを入れてくださった。

（2）友の意味

昔、アブラハムは「神の友」と呼ばれた（ヤコブ2:23）。「神の友」という言葉を理解するために、旧約聖書の中で使われている「王の友」という言葉を考えてみたい。

フシャイという人は、ダビデ「王の友」と呼ばれた。「アヒトフェルは王の助言者で、アルキ人フシャイは王の友であった。」(I 歴代27:33)。またザブデはソロモン「王の友」と呼ばれている。「ナタンの子アザルヤは政務長官、ナタンの子ザブデは祭司で王の友、」(I 列王4:5)

このように呼ばれた人は、どういう立場の人なのかと言うと、どんな高官よりも王と親しく話をする特権を持っていた者で、他の人はみな王の執務室までしか入ることができないのに、「王の友」は王の寝室にすら入ることが許されていたと言われている。

それと同じように、「神の友」アブラハムに対しては、神がこう言っておられる。

「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」(創世記18:17)

こうして、神はアブラハムに、ご自身がしようとしておられるご計画を示しておられる。

「友」とは信頼を得た者のこと。友に対してなら、私たちは将来の計画を告げる。内密の情報も共有する。弟子たちが「主のしもべ」であることは変わらないが、彼らはそれ以上の間柄、「友」となる、というのである。

主はこの時すでに、「父から聞いた」ことを弟子たちに告げておられた。主は、ご自身が去って行かれること、聖霊が来られること、ご自身が再び来られること、そして、その間における弟子たちの責任について語られた。

私たちは、枝としてのいのち・滋養を受け(5節)、弟子として従い(8節)、友として信頼の交わりをする(15節)。

私たちキリスト者も、主が「友」と呼んで下さる以上、同様の特権が与えられていることを知らなければならない。

「父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。」(15節b)

そして、そのことは、今も全く事情は変わっていない。これは十一使徒だけのことでなく、聖書の中に主はこれからなさろうとしておられるすべてのご計画、御心を私たちに示して下さっておられる。

（3）友である条件

しかし、ここには一つの条件がある。主が次のように語っておられることに注意しなければならない。

「わたしが命じることを行なうなら、あなたがたはわたしの友です。」(14節)

私たちが主が命じられたことを行なうこと、主に対して心を開くことである。それでは、主は私たちにどのように命じられているか。

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」(12節)

私たちが互いに愛し合う時、主は私たちを友と呼び、親しく御心を示して下さる。そして、主は、私たちが互いに愛し合うことができるように、ご自分のいのちを私たちのために捨てて下さる。

「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」と言われた。

そのように私たちはお互いに愛し合わなければならないのである。愛とは、口でそれを語ることだけのことではない。自分のいのちをその人のために捨てることができなければ、愛と言うことはできない。

どこにそんな愛があるか。ここにある。神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされた。この愛を知った人は、同じように神を信じ、神によって生まれた人たち、すなわち、信仰の仲間を愛するようになる。私たちが互いに愛し合うなら、そのことによって私たちが神のうちにとどまっていることがわかる。

なぜなら、キリストにとどまるとは、キリストの愛にとどまること。これが、イエス様が繰り返して言われたことであり、主が与えてくださった戒めである。この戒めを行なうなら、イエスの「友」なのである。

現実の生活において、そのように友のために自分のいのちを捨てるということはあまりないが、洞爺丸の沈没事件で、救命胴衣を譲った宣教師たちがいる。1954年（昭和29年）9月26日に青森と北海道の函館を結ぶ、青函連絡船洞爺丸が台風15号のために座礁転覆し、乗員・乗客1314人のうち、1155人が死亡するという事件が起きた。

その船の中にアメリカ人宣教師ディーン・リーパー（33歳）と、カナダ人宣教師アルフレッド・ラッセル・ストーン（52歳）とドナルド・オースが乗り合わせていた。

次第に激しさを増す風雨と大波の中で、乗船客たちはパニック状態に陥った。やがて全員に救命胴衣の着用指令が出され、三人はおびえる乗客をなだめ、励ましつつ救命胴衣の着用の手助けをし、リーパーは、救命具が壊れたと泣き叫ぶ子供づれの母親に自分の救命具を渡した。そして、ストーンは、救命具のない学生を見つけ、「あなたの前途は長いから」といって救命具を譲った。リーパーとストーンに救命胴衣をもらった日本人は生還し、三人の宣教師のうちオース宣教師のみ奇跡的に助かった。

この海難事故から二日後にストーン宣教師の遺体が、その後、リーパー宣教師の遺体が発見された。多くの犠牲者たちは救命胴衣を着けたまま亡くなっていたが、この二人は救命胴衣を身に着けてはいなかった。なぜなら、二人とも、自らの救命胴衣を他の乗船客に差し出して死んでいったからであった。そのことは、生存者からの証言によって明らかとなった。

現実の生活において、このような場面に遭遇することは極めて稀である。では、イエス様がここで「自分のいのちを捨てる」と言われたのはどういう意味だったのか。

ここで「捨てる」(ἀτίθημι ティセミー) と訳されている言葉は、「捨てる」という意味だけでなく、「置く」とか、「差し出す」という意味を持っている。だから、自分のいのちを自分のためだけに使うのではなく、他の人々のためにささげて生きていくことも意味している。

自分さえよければいいと考える自己本位な生き方でなく、ほかの人のために自分を差し出す生き方である。あの洞爺丸に自分が乗り合わせていたらいったいどんな行動を取っていたかと思うと自信がなくなる。だれよりも早く逃げようとしたのではないかと思う。しかし、こんな者のためにイエス様は十字架で死んでくださった。それによって愛がわかった。自分のいのちを捨てるなんて到底できないと思うような者であるが、そんな者のためにイエス様が十字架で死んでくださったことを思うと本当に感謝なことであり、この「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」というみことばを何とか実践したいと思うようになる。

（4）選ばれ、任命された

そして主は、そのような主と私たちキリスト者との関係は、私たちが選び取ったものでも、また私たちが作り出したものでもないことを、次のように教えられた。

「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。

それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名に

よって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」(16節)

これは主がその友と呼んでくださる者たちに親しく教えてくださる「特別な教え」であると理解することができる。私たちと主イエス・キリストとの関係は、主が私たちを選んでくださったことに始まる。そして主は、私たちを任命してくださった。それは、主の働き人としてである。

この「任命した」と訳されている言葉は、13節で「いのちを捨てる」と訳されている、あの「捨てる」と同じ言葉である。主がご自分のいのちを捨ててまで愛して下さり、「友」としてくださった私たちを、主は「行って実を結ぶ」者として任命してくださったのである。

「行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり」と主が語られているところから、この実は、ここでは伝道によって与えられる実を指していることが分かる。

ここでは、私たちが出て行って伝道し、その伝道の実がいつまでも残るようにと、主は私たちをその働きに任命してくださった。それだけでなく、主は、主のお名前によって祈る祈りに、父なる神が必ず答えてくださることも約束してくださった。このすばらしい約束が私たちの身の上に成就するために、私たちのしなければならないことは、互いに愛し合うことである。

主が友と呼んでくださるこの特別な恵みの意味を深く味わい、その語られたところに従う者でありたいと思う。